**２０２０年度　入門講座**　　　　　　　 2020/11/22（日）

**第二十二課　教会の誕生　聖霊降臨**

**１．イエスの昇天**　　マタイ28：16～20 (ルカ24：50　使徒1：6～11)

イエスから使徒たちへの責任の交替

|  |
| --- |
| さて、十一人の弟子たちはガリラヤに行き、イエスが指示しておられた山に登った。  そして、イエスに会い、ひれ伏した。しかし、疑う者もいた。イエスは近寄ってきて言  われた。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。だから、あなたがたは行って、  すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、  あなたがたに命じておいたことをすべて守るようにしなさい。わたしは世の終わりまで、  いつもあなたがたと共にいる。」 |

昇天は一番高い所に挙がることを意味している。キリストは死ぬことによって、限られた現

象から解放され、宇宙との新しい関係に入った。

責任の交替；イエスのミッションが弟子たちにゆだねられていく。復活後四十日という数字は意味がある。歴史的にいつであったかを確かめることはできないが、弟子たちがイエスの「死と復活」の意味を消化して自分のものとし、それを生きるために、この時間が必要だったと考えられる。

イエス黄泉（陰府）に降る。

使徒信条「イエスは十字架につけられて死に、葬られ、(陰府)に下り、三日目に死者のうちから復活し、天に昇って、全能の父である神の右の座に着き、・・・・・」

黄泉　黄泉は宇宙の一番深いところで、死んだ人たちが救いを待っている場所を指す

象徴的表現。復活とは深いところからの復活である。キリストは宇宙の中に入り、

歴史の中に入って、そこで救いを実現して彼らと共に復活するのである。

キリストは、この地上の生が終わってもまだ永遠の喜びに帰っていない人々のもと（黄泉）

に行き、まだ救いが完成された状態に入っていない人々一人も残さず天に引き寄せた。

黄泉は宇宙の一番深いところに入ったというシンボルである。

**２．**　**聖霊の降臨　；**イエスは共同体に霊を送る。　（使徒２：１～４）

聖霊の降臨は「ペンテコステの祭り(五旬祭)」に起こった。

ところで、「イエスのヨルダン川での洗礼→わたしたちの洗礼」というつながりも大切であるが、「ヨルダン川→ペンテコステ→堅信の秘跡」というつながりも大切だ。ヨルダン川で聖霊に満たされた時から、イエスの神の子としての活動が始まっていったように、ペンテコステ(五旬祭)の日、使徒たちの上に聖霊が降り、使徒たちは福音を告げる活動を始めた(使徒言行録2章)。堅信の秘跡は、同じようにわたしたちが聖霊を受けて教会の使命に参与することを表している。聖書の多くの箇所で聖霊は「ミッション(派遣・使命)」と結びついており、人間が神から与えられた使命を果たすことができるように、神の力である聖霊が支え導くのである。これこそが堅信の秘跡の中心テーマである。

「自分が神に愛された子であると深く受け取ること」「聖霊に支えられて神の子としてのミッションを生きること」もちろん、それは秘跡の中だけのことではない。どんなときにわたしたちはそう感じることができるだろうか。

|  |
| --- |
| 五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、突然、激しい風が吹い  てくるような音が天から聞こえ、彼らが座っている家じゅうに響いた。そして炎の  ような舌が分かれ分かれに現れ、「霊」が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話し  出した。 |

神の霊が１２使徒の上に降ったとき、彼らは変わり、その瞬間から勇気に満ちてキリストのメッセージ、つまり「喜びのニュース」を伝え始めた。キリストの教会の誕生である。

聖霊の七つ賜物　「知恵・理解・判断・勇気・神を知る恵・神を愛す・敬う心」

使徒言行録によると、ガリラヤで復活の主の出現を体験した弟子たちは、主の命じた通り、エルサレムに集まって約束された聖霊を待つ。ユダヤ人の祭り、過ぎ越しの祭りから五十日目の祭りを五旬祭と言う。聖母マリアを中心に弟子たちが一堂に一つになって集まっていると、突然、神の創造の息吹である聖霊が降り、一同は聖霊に満たされた。弟子たちは、イエスが生前に約束していた通り、父からの聖霊を受けて、イエスを通してなされた救いの神秘を理解した。これを世界の人々に告げ知らせるための勇気を授かったのである。

* 旧約聖書における聖霊；人間社会と自然界における神の現存を表現することば『わたしがお前たちの中に霊を吹き込むと、おまえたちは生きる』

エゼキエル37:1-14

　「Ruah（ルア）」というヘブライ語を用いる。＝「息（息吹）」「風」「精神」

　神の霊がなければ何もかも殺風景で渇ききった状態、しかし神の霊が吹きこまれると潤いのある生き生きとしたダイナミックなものとなる。エゼキエル36:26-28

* 新約聖書における聖霊；「PNEUMA(ニューマ)」というギリシャ語を用いる。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（参照Mt.3:16,7)

　聖霊はイエスの中に現存する神の力で、イエスを通して働きかける。

イエスの洗礼、受胎、荒野での誘惑、悪霊を追い出すetc

イエスは、最後の晩餐の席で、「実をいうと私が去って行くのはあなたがたのために

なる。去っていかなければ、弁護者はあなたがたの所に来ないからである。わたしが

行けば、弁護者をあなたがたのところに送る。」（ヨハネ：16:7　最後の晩餐の席で）

イエスは人としては見えなくなるが、イエスの霊(聖霊)は共同体としての教会の命になるという意味。　聖霊はいつも教会の中に住み、誤りから教会を守ったり、導いたり、その原動力となっている。

『あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。』（マタイ28：19）

　教会はペンテコステの日に目に見える共同体として誕生した。その頃からエルサレム

の町が中心となっていたが、弟子たちはそこから次第に視野を広げて、キリストの喜び

のニュースを伝えるために、もっと遠いところまで足を延ばすようになった。

**Ⅰ初代教会**

**１．教会の意味**

　　　教会とは、ギリシャ語で「エクレシア」と言い、「呼び集められた人」という意味である。すなわち、キリストによって兄弟姉妹とされ、イエスの教えに従って生きる人々の集いを教会と呼ぶ。キリストの弟子たちを中心に生まれた教会はペトロを頭として、徐々に信者を増やし、使徒パウロによって地中海世界にキリスト教が伝えられていった。教会の頭ペトロの使命は、その後継者ローマ法王と呼ばれる教皇に受け継がれ、現在の教皇は２６６代目フランシスコである。

　古代・中世・現代に至る教会の発展(あるいは退歩か変化か)について見ていくが教会史の勉強ではない。人間の一生にたとえると、人は生涯をかけて人間になっていく。同じように、教会も自己実現（完成）に向かって旅する教会である。神の教会は、それを形成している人々の手に委ねられたとき、人間的な失敗や罪を繰り返し、今日まで発展してきた。教会は常に罪人の教会である。その罪の姿の中に教会の本質を知ることができる。

* ヨハネの福音書序文にみられる教会の姿　（ヨハネ.1:1-8）参照①

キリストの誕生の報告に代える

Ｊｎ9章の目を癒された男の話。イエスに従っていこうとして、ユダヤ人の村から追放され、村八分にされた。それでも信者たちは、一致団結して祈った。初期の信者たちは、その厳しさの中で聖霊に導かれて強められた一つの共同体、すなわち「教会」として集まって、共に祈り神を賛美した。「パンを裂き」イエスが最後の晩餐で行ったことの記念を行った。これが現在のミサの原型である。

**２．教会の最初の教皇**

* 1. 「あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる。黄泉の力もこれに対抗できない。わたしはあなたに天の国の鍵を授ける。あなたが地上でつなぐことは、天上でもつながれる。あなたが地上で解くことは、天上でも解かれる。」マタイ16:13-23 参照②
  2. ヨハネ21：15～17

　　　「わたしの羊を飼いなさい」と三回も繰り返された。

　同じ言葉を繰り返して言うことは、何かを特別に強調したいとき使った用法。信徒たちは、キリストがペトロをご自分の新しい教会の土台としたことを信じていた。このせっかちで気まぐれで、無学な男を、初代教会の頭と定めた。

　キリストの教会は世の終わりまで続くべきものであり、教会の頭としてのペトロの使命は、その後継者に受け継がれて今日に至っている。いわゆるローマ法王と言われ、現代の教皇フランシスコで２６６代目である。

　教会の初代教皇となったペトロは、紀元６５年頃、ローマに行き、そこの最初の司教になった。それから、ローマ皇帝、ネロの迫害に遭い、そこで信仰のために殺され、殉教した。(その時以来、教皇がローマの司教を兼任している)

**３．パウロの回心と異邦人への宣教**

使徒9：1～6,19～22　　参照③

　キリスト教が独自の発展をしていく過程で、パウロという人物の果たした役割は

大きい。パウロはファリサイ派のユダヤ人であるが、現在のトルコの南、地中海

沿岸のタルソスの出身、ローマ市民権を持つ知識人であった。当時のユダヤ教の

最高の教育を受け、律法を真面目に守っていたパウロは、ユダヤ教の正統信仰を

ゆがめるキリスト者に対して激しく抵抗、弾圧していた。ところが、このパウロが

復活したイエスと出会って回心する。ユダヤに生まれたキリスト教を世界の宗教に

したのは、この異邦人の使徒パウロであった。

ユダヤ教から破門され迫害されるようになったキリスト者は、エルサレムを離れて

世界各地に出かけて行き、次第に異邦人に宣教するようになった。宣教活動によって信徒の数が増えると、当然結束を保つために、その組織や運営に指導的な役割を果たす人々が必要になり、時とともに統合され、二世紀以降、「監督」「長老」「執事」という三段階の役職として定着した。カトリック教会では古来の三段階の職制を継承して、「司教」「司祭」「助祭」という名称で呼んでいる。

1. **迫害時代**

長い歴史のあるユダヤ教から見れば、当時のキリスト教は新しい宗教であって、ユダヤ人たちになかなか受け入れられなかった。

さらに、ローマ帝国の指導者たちからは、民衆をあおって帝国に反乱を起こす危険な集団と見られていた。こうしたキリスト教徒たちへのローマ帝国による見方は、迫害として現れたのである。

教会は使徒の時代からローマ帝国の支配下で、３００年もの迫害時代を通り、多く

の殉教者を出した。しかし、殉教者の血は信仰の種となり、迫害にもかかわらず信徒は増え続けたのである。

初期の時代の迫害ではネロ(1世紀半)やドミティアヌス(1世紀末)によるものが知られている。ローマ帝国内では古代ローマの神々を礼拝し、皇帝自身を崇拝することが求められ、それを認めないキリスト教徒は無神論者として捕えられ処刑された。(コロセウム、カタコンベ)

初期のキリスト信者の質の高さは迫害と密接に関連している。殉教による証は高く評価された。

自分の命をかけて生きていた。信仰とは生をもってなすこと、自分の命をもって証するもの。